



室蘭工業大学地域共同研究開発センター センター ニュース 平成20年度 2. 事業推進検討会

雑誌名	室蘭工業大学地域共同研究開発センター センター ニュース
巻	20
ページ	6-27
発行年	2009-05
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009338

2. 事業推進検討会

開催日：平成20年7月2日（水）15:00～17:00
場所：室蘭工業大学共同利用施設会議室
出席会員：秋山俊彦，伊藤秀明，小川洋典，尾谷 賢，工藤 恣，下地賢芳
中田孔幸，宮本英一，森本英雄，矢崎 尚，矢島清孝，宮地隆夫
世利修美
関係大学教職員：岸 徳光，加賀 壽，鈴木雍宏，朝日秀定，関川純人，黒島利一
木村政和，川岸 斉，依藤充明，齊藤雅利，伊藤陽平
オブザーバー：石坂淳二，伊庭野 洋

次 第

- 開 会 告 示
- 挨拶：室蘭工業大学 理事 岸 徳光
- 会 長 選 出：矢島 清孝（兼議長）
- 副 会 長 選 出：宮地 隆夫
- 会 長 挨 拶：会 長
- 自 己 紹 介：出席会員全員
- 大学関係者紹介：オブザーバー，大学関係職員
- 討 論：平成20年度活動報告，平成21年度活動計画，質疑応答
- 挨 拶：岸 徳光

会議録

○司会（木村）

予定の時間になりましたので，始めさせていただきます。

本日は大変お忙しい中，皆様方お集まりいただきありがとうございます。

ただいまから平成20年度室蘭工業大学地域共同研究開発センター事業推進検討会を開催いたします。
開催にあたりまして，室蘭工業大学理事 岸 徳光より挨拶がございます。

○岸

本日は皆様ご多用にもかかわらず，本学の共同研究開発センターの事業推進検討会にご出席いただきましてまことにありがとうございます。心から御礼申し上げます。

本来ならば学長がご挨拶を申し上げなければなりませんが，あいにく所用がございまして，ご挨拶申し上げることができませんので，産学連携担当理事であります私からご挨拶を申し上げます。

本検討会の趣旨やCRDセンターの活動関連に関しましては，加賀センター長から詳しく説明があると思いますので，私からは大学全般の最近の状況についてお話をさせていただき，開会の挨拶とさせていただきます。

大学全体の最近の状況としましては，法人化されて4年が経過し，5年目に入っております。国立大学法人は，法人化と同時に6年間の目標や計画を立てまして，年度経過に沿った事業の成果を，事後評価するのが基本になっております。今年10月には，これまでの4年間の実績に関して暫定評価を受けることになっています。具体的に教育，研究，社会貢献，国際交流，大学の管理・運営などの総合的な評価です。この評価結果をもとに次期中期目標，中期計画期間中の運営費，交付金が決定されるとも言われており，大変重要です。6月30日締め切りということで提出しております。

このほか工学系大学としまして，法人評価以外に技術者教育認定機構，いわゆるJABEEの審査や大学評価学位授与機構で毎年度の評価を実施しております，大学全体としての認証評価も受審しなければなりません。法人化以降は，評価に追われておりますが，全学を挙げて対応する体勢で臨んでおります。認証評価に関しましては，昨年11月に審査を受けております。

個々の活動で申しますと，教育面では来年度に向けて学部大学院の大胆な改組再編計画を進めており

ます。具体的には教員組織と教育組織を分離します。これは学士課程大学院教育の大胆な再編を可能にするためということです。今は学科に教員が配属されているのですが、学科ではなくて4つの領域を設け、そこに配属させまして、そこから各学科、コースに派遣して教育する形にしております。学部は6学科から4学科12コースに改編します。大学院博士前期課程は、現在6専攻ですが、今年度新たに3専攻設けましたので、7大専攻の14コースに学部を改組します。博士後期課程は、4専攻から5専攻に改組の予定です。

ほかには先ほども申し上げましたが、4月から航空宇宙機システム工学専攻、公共システム工学専攻、数理システム工学専攻の3つの新専攻を設置しております。JABEE認定を受けることも大学としては最重要課題でありまして、現在は半数がJABEEの認定を受けておりまして、今年度残りの半数の学科あるいはコースが受審する予定です。これですべてが受審して認定される予定であります。

研究面では、法人化の早い時期に感性領域、環境科学領域、新産業領域を重点に位置づけまして、それぞれサテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー、環境科学防災研究センター、航空宇宙機システム研究センターにおきまして、重点的に研究を進めております。

特に航空分野では、白老町のご協力を得て燃焼実験もできる新しい実験場を用意できました。文科省に概算要求をしておりました特別教育研究経費が認められまして、予定ですが今年度から5年間、総額約7億円程度の予算が配分される予定になっております。そういうことで飛躍的に研究が推進するものと期待しております。

地域連携につきましては、本日の検討会の話題にもありますが、本学は地元の金融機関や自治体、企業、報道機関、大学等22の機関と協定を結び連携をしまして、社会貢献、地域貢献に努めております。来週には北海道洞爺湖サミットが開催されますが、サミット関連事業、特に地球環境問題に関しまして、連携、協働、共催、あるいは本学単独のフォーラムやセミナー、出前講義等、さまざまな催し物を開催しております。

本学の最近の状況につきましては以上のとおりでありますけれども、事業推進検討会は本学と地域企業との共同事業を推進していくための、いわばシンクタンク的な役割を持っていると考えております。地域に根差した大学、地域に必要とされる大学ということであれば、一番重要な位置づけにある事業、組織であると認識しています。そういう意味でも本日の検討会で、皆様方の有意義な意見をいただき、CRDセンターだけにとどまらず、大学の事業にも反映させていただきたいと思っておりますので、忌憚のないご意見をお寄せいただきますようお願いいたします。雑駁ではありますが、挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

○司会

検討会に入ります前に、お手元の資料確認を行いたいと思います。最初、「平成19年度室蘭工業大学地域共同研究開発センター事業推進検討会」という資料がございます。続きまして本日の検討会の資料等はパワーポイントで作成したものでございます。次に参考資料として「室蘭工業大学概要」が入っていると思います。続いて「CRDセンターの概要」が入っていると思います。最後に「平成19年度CRDセンター・センターニュース」でございます。資料に不足がありましたら、事務局にお申しつけください。

それでは室蘭工業大学地域共同研究開発センター事業推進検討会の議事に入らせていただきます。本会の会長が選出されるまでの間、室蘭工業大学地域共同研究開発センター長に議長及び議事の進行をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

(異議なしの声あり)

それでは加賀センター長、よろしくお願いいたします。

○加賀

本日は、ご多忙の中、検討会にご出席いただきましてありがとうございます。

私どもセンターの趣旨等についてご説明申し上げたいと思います。

本学の地域共同研究開発センター、通称CRDセンターと呼んでおります。昭和63年、当時の文科省により奨励施設として設置が認められ、今年で21年目を迎えております。二十数年前の日本は、いわゆる重厚長大産業から軽薄短小に、産業構造が大きくシフトするという状況の中で、大変苦しい状況にありました。私どものセンターは、北海道では一番早く設置されております。本学に比較的早くに設置

された理由としては、この地域が北海道の中で一番重厚長大産業が栄えた地域であったことによります。このため室蘭地域が産業構造の変化の影響を道内で一番大きく受けて、現在の大手企業さんの活況からは想像もできませんが、皆様の記憶に残っているかと思いますが、鉄冷えという言葉もあったほど、地域の産業は混迷しておりました。このような構造不況は、室蘭地域が特に目立ただけで、全国的な傾向でもありました。これらに対処するため、国のさまざまな施策の中で、当時の文科省所管事業として、国立大学に地域共同研究開発センターを設置して、その地域の産業、経済の活性に寄与させようという施策が実行されはじめておりました。そこで本学はいち早く、このセンターの設置の要求を行って、全国で2番目にCRDセンターが設置されております。それ以降、当CRDセンターは積極的に種々の事業を行っています。この事業推進検討会は、本学で独自の制度と言ってよい取り組みで、毎年、この事業推進検討会の委員の方々から、当センターの活動や運営に対してご意見、ご提言をいただき、当該年度、または次年度の活動等に反映させる手法をとらせていただいております。

検討会の委員の皆様は北海道各地域のものづくり、あるいは産学官連携、研究・試験機関で研究等に携わって居られる方、報道機関等と広い分野の方々にお願ひし、毎年開催しております。お手元の資料の規約に載っているかと思いますが、CRDセンターの事業について、前年度の事業報告を行い、それについてのご意見をいただいております。それに引き続き、当該年度の計画をご説明申し上げ、ご意見をいただくことになっております。いただいたご意見、ご助言、ご提言は、当センターの事業、また管理・運営に反映させていただき成果をあげております。

本検討会からいただいた提言による活動の特徴的なことについて2、3ご紹介させていただきます。以前、共同研究成果を商品化、事業化につなげる仕組みの活動が必要であるとご指摘をいただいております。平成19年度からは、後ほど事業報告として紹介させていただきますけれども、月1回の割合で本学と室蘭テクノセンターのコーディネーターの皆さんと集まり共同研究のフォローアップ、さらに事業化の支援を行っております。また事業化に向けては、技術的な面では本日ご出席いただいておりますけれども、道立工業試験場と連携し、機能分担と対応できる技術分野の間口を広げ、事業につながるよう積極的に行っております。つい先日でもテクノセンター、工業試験場と地域の企業を訪問し、次のステップに向かって検討しております。

共同研究に対する企業からの評価と意見の把握をすべきとご指摘をいただいております。共同研究をやりっぱなしではないかということもありましたので、昨年度は受託・共同研究企業に対し、アンケート調査を行いました。約70件の回答がありました。後ほど概要についてご報告申し上げますが、具体的な課題も見えております。今年度も引き続きアンケートを出し、今、回収中でございます。さらにアンケート調査では、文字でご意見をいただく部分もありますので、細かなフォローアップを開始しているところです。

もう一点、大学の研究シーズはシーズ集の充実ということで、広報活動も重要ですが、地域企業のニーズの把握にもっと努めるべきだというご指摘もございました。私どもも当事者として必要性を痛感しておりました。後ほど詳細をご紹介しますが、事業が非常に多岐にわたり、今までマンパワーも不足しておりましたけれども、今年4月から室蘭市の職員の関川氏を本学に派遣いただき、特認准教授として活躍していただいております。また、大学独自に伊庭野コーディネーターを専任として採用しております。また地域企業訪問に必要な車もCRDセンター専用に入れていただきました。これら地域企業ニーズの御用聞きの状態も整いましたので、企業訪問を積極的に開始してまいりたいと考えております。これらはひとえに事業推進検討会議の皆様からいただいたご意見、ご助言、ご提言を活動に反映させた結果と思っておりますし、私どもの大学の経営陣の皆様にも理解をいただいているところでございます。

なお昨年は諸事情で、本検討会を12月に開催し、私は体調不良で参加できなかったことを申しわけなかったと思っております。皆様方からいただいたご意見や助言を年度内の活動に十分にいかすことができなかったと思います。本年は時期を大幅に早めて、皆様方からいただいたご意見やご助言をいかした活動を行う所存でございます。後ほど私から平成19年度のセンターの活動報告及び今年度のこれまでの活動報告とこれからの計画についてご報告申し上げます。

国立大学法人にとって、5回目の事業推進検討会です。ご紹介申し上げましたように、これまでいただいたご意見を活動に展開してまいっておりますので、本日もどうぞ忌憚のないご発言をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。CRDセンター設立の経緯を含めまして、簡単にこの会のご紹介をさせて

いただきました。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

では本会の会長の選出を行っていきたいと思います。資料2ページの規約第五条の規定に基づき、会員の互選により選出したいと思っております。なお、会員につきましては資料3ページ目の名簿の方々がございますけれども、本日都合により、CRDセンターの研究協力会会長であります石橋 靖様、株式会社室蘭民報社常務取締役工藤 忖様が欠席されております。皆様の中で自薦、他薦で会長を選出願いたいと思います。どなたか会長をお引き受けいただける方がおりましたらお願いしたいと思います。いかがでございましょうか。特になければ私から推薦させていただきますけれども、よろしいでしょうか。

(はいの声あり)

では、財団法人室蘭テクノセンター専務理事であります矢島様にお願いしたいと思います。ご承認いただけますでしょうか。

(異議なしの声あり)

どうもありがとうございました。それでは規約で、会長が議長となることになっておりますので、議事の進行を矢島会長にお願いしたいと思います。矢島会長、よろしくお願いいたします。

○矢島議長

室蘭テクノセンターの矢島でございます。僭越ではございますが、ご指名でございますので、本検討会の会長を務めさせていただきたいと思っております。

先ほど加賀先生から、本検討会の役割などについては、要約しますと室蘭工大の先生方と本日ご出席の会員の皆様方が意見交換を行うことにより、今後のCRDセンターの事業推進にお役立ていただくということであろうかと思っております。ご案内のとおりCRDセンターにつきましては、開設以来民間企業との研究交流、共同研究の推進、地域社会との連携など各種事業に、積極的に取り組まれ今日に至っております。特に最近では、先ほどお話しにもございましたように地域企業との交流を通じまして、大学のシーズの積極的な紹介、あるいは逆に企業ニーズの把握、共同研究、さらに後ほどご紹介があるかと思っておりますが、セミナーや研修会の開催など、活発に事業が進められています。このような取り組みが進められるほどに、地域社会あるいは産業界の大学及びCRDセンターへの期待もますます大きくなっているものと感ぜられるところでございます。

本日は限られた時間でございますが、忌憚のない活発なご意見交換をお願い申し上げまして、簡単ではございますがご挨拶とさせていただきます。と思っております。

早速議事を進めてまいりたいと思っております。

始めに規約第五条の規定に基づきまして、会員の皆様の互選により副会長の選出をお願いしたいと思います。

特にご意見がないようであればございましたら、私からご推薦させていただきたいと思っております。よろしゅうございますか。

(はいの声あり)

それでは副会長に室蘭工業大学の宮地理事にお願いしたいと思います。ご承認いただけますでしょうか。

(異議なしの声あり)

それではよろしくお願いいたします。

次に、今日ご出席の会員の皆様に、簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。おそれいりますが、私の右側の方から順によろしくお願いいたします。秋山様から、よろしくお願いいたします。

○秋山

苫小牧高専校長の秋山でございます。

この4月1日付けで赴任いたしました。室蘭、苫小牧地区は、余り承知しておりませんけれども、赴任した当初、地域の企業等にご挨拶にうかがったところ、学校に対する地域の期待が非常に大きいものがあるということで、そのような学校運営に努めなければならないと肝に銘じた次第でございます。よろしくお願いいたします。

○伊藤

日本製鋼所の伊藤と申します。

昨年までは田中が検討会の会員になっていましたが、今年4月に本社に転勤となりましたので、引き継ぐ形になっております。

私ども日本製鋼所は室蘭工業大学さんとは非常につながりの深い、昔から関係が深い位置にございまして、いろいろお願いしたり、共同研究に取り組むこともやってきております。このCRDセンターがさらに発展されていくことを望んでおりますので、これからもよろしくお願いいたします。

○小川

ノーステック財団研究開発部の小川でございます。よろしくお願いいたします。

4月1日で前任の山中に代わってまいりました。今回参加させていただきます。当財団は、昨年9月に室蘭工業大学さんと業務提携を結ばせていただきまして、地域の発展のために努力させていただきます。一つよろしくお願いいたします。

○尾谷

道立工業試験場の場長の尾谷です。場長になり3年経ちまして、この検討会にも3年出席させていただいております。

私どもは公設ということで、道内のものづくりの企業さんの実験機関で、先ほどもありましたけれども、大学が民間になって、大学の大きなミッションとしての地域貢献というものがあると思います。本当の室蘭工大の担い手はこのCRDセンターということで、そういう意味では少し、我々と似たようなミッションをCRDセンターは持っておりますので、日ごろ我々が進めている中で、シーズは重要な技術開発です。そういった意味では大学も我々も対応してございますし、そんなわけで一緒にできればということで、そんな意味で意見交換をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○下地

株式会社ドーコンの下地でございます。

今回で4年目を努めさせていただきます。私、本学の卒業生でございますので、年々CRDセンターの活発な活動が目についてきて、大変心強く思っている次第です。今後ともよろしくお願いいたします。

○中田

室蘭市建設業協会の中田でございます。

建設業協会は、ご承知のように大変厳しい状況でございまして、ソフトランディングとかいろいろ言われております。一昨年から商工会議所の建設業部会のほうが建設業及び関連業種の方々が所属しているのですけれども、その会で、工大さんのシーズの見学というか、勉強会をさせていただいております。CRDセンターを通じて業界の皆さんに、企業の足腰を強くし、下支えしましょうということでPRさせていただいております。よろしくお願いいたします。

○世利

本学の機械システム工学科の世利と申します。よろしくお願いいたします。

私がなぜこのメンバーに入ったかと言いますと、大学が法人化になっても敷居が高いというお声があるのですが、外から見ると一種の鎖国みたいなもので、中の職員も結構大変なのですけれども、CRDセンターは一種の技術的な出島だと思っています。対外的にここが活発になれば、本学が変わると思って、設立当初から関与してきたので、その一貫として私がメンバーに入ったのではないかと考えております。

本学のために、忌憚のないご意見をいただいて、我々もご意見をいただいて中を改革する、あるいはお役に立つ地域に貢献になるように配慮して研究していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○宮地

室蘭工業大学総務担当理事の宮地と申します。よろしくお願いいたします。

私、室蘭工業大学に来て3年目に入りまして、この会も3回目の出席でございます。1回目は、よくわからないままお話しをお聞きしていたのですが、今年3年目になり大学の財務関係もしておりますので、CRD センターの充実ということで、予算面でも、大学というのはいましてお金がないのですけれども、その中でできる限りの配分というか、お金を渡したいし、室蘭市の関係もございましてけれども、人もかなり充実してきている中で、加賀センター長はじめ、盛りだくさんの事業をしております。そういう意味で、去年、今年もあると思いますけれども、その辺のところを皆様からいろいろな話をお聞きしながら、今後、来年以降のCRD センターへどのようなサポートをしていけばいいかを考えていきたいと思っています。今日はよろしくお願いいたします。

○矢崎

北海道機械工業会室蘭支部の支部長の矢崎と申します。

北海道機械工業会全体で約370社あるわけですが、室蘭としては約1割で37社の会員を抱えていて、中ぐらいの支部でございます。私は4年ぐらいこの会員で、その立場で参加させていただいております。また今回は、機械工業会という立場で参加させていただいて、少しでもお役に立てればと思っております。よろしくお願いいたします。

○森本

経済産業省北海道局の森本でございます。

前回、私は欠席しまして、赤繁が出席させていただきまして、私は初めてでございます。

CRD センターは、地域という名前がついていますけれども、産学連携の基盤を担っていると感じております。私ども経済産業省のスタッフとしても、産学連携を通じたイノベーションの創出ということ。それから室工大さんとはもう一つ大きなご協力いただいているのが、産業人材の育成ということでございます。前からいえばMOTのところで一緒にやらせていただきました。そして桃野先生を中心に鋳物のところで製造中核人材育成をやっていただいております。それから今日の資料にありますけれども、今年度は原子力の人材についてもスタートしていただくということで、非常に関係深くやらせていただいております。今日の会議に参加させていただいて、本当にありがとうございます。原子力についてはこれからということだと思いますけれども、私自身が原子力委員会で、うちの局長が原子力の保安関係をしたこともあって、この二人でかなり進めてきました。今回はハードルの高い募集に応募をいただき、本当に力強く思っております。地域ということはもちろんあるのですけれども、日本全体に広がっていくと考えておりますので、是非大学の大きなご協力をいただきたい。

○宮本

北海道電力総合研究所の宮本でございます。

私も社内の移動で総合研究所の所長になりちょうど1年になります。前回の検討会にも参加させていただき、今日は2度目になります。

室工さんとは、私ども技術研究所でも大変お世話になってございます。一つは私どもの社内の技術研究の中に、大学の先生方のご協力を是非いただきたいということもございまして、それから私ども室工さんの学生さんを大分採用させていただいておりますが、これから技術者をどんどん世の中に輩出していただきたいということもございまして、私どもも何かお手伝いになることがあればと考えております。

もう一つは、私ども北海道の企業として、地域の産業発展にお役に立ちたいと思ってございまして、そういう意味でも連携できることがあるのではないかと考えてございますので、今後ともよろしくお願いいたします。

○矢島議長

続きまして、ご出席の大学関係の方々を、司会の方からご紹介をお願いしたいと思います。

○司会

大学関係者を紹介いたします。理事の研究社会連携担当岸 徳光でございます。

以下（センター長の教授加賀 壽，知的財産本部の教授鈴木雍宏，CRD センター准教授朝日秀定，特認准教授関川純人，文部省産学連携コーディネーター石坂淳二，CRD センター専任コーディネーター伊庭野 洋，地域連携推進課長木村政和，川岸）を紹介。

○矢島議長

本日の議事に入りたいと思います。最初のテーマは平成 19 年度の CRD センター事業について，加賀センター長からご説明をお願いします。

○加賀

パワーポイントの関係で，皆さんの後ろ側から説明させていただきます。昨年の検討委員会で委員をなさっていた方は重複する部分があると思います。12 月でしたので，結果もかなり重複していると思いますが，初めての方もいらっしゃると思いますのでよろしくお願いしたいと思います。

平成 19 年度のセンター事業報告をさせていただきます。

最初にシーズ紹介と地域連携 CRD セミナーということで，地域の異業種交流の皆さんを中心にシーズを紹介してございます。こちらは環境産業推進コア。登別市でソーダさん等と一緒にしました。環境も一緒にはいっています。そのほかに函館地域から本学に来ていただきまして，我々 CRD センターの活動やものづくり基盤センターを見学している状況です。ほかに航空宇宙機等を半日かけて見学していただきました。これは 2 回目で，1 回目は本学から函館に行き，今回は函館高専から長谷川校長先生以下，先生も何人かお見えになって，北海道機械金属連合会や機械工業会など異業種の皆さんが来られて，シーズを紹介した例でございます。

企業との技術交流会として日本製鋼所さん，北海道電力さんとも交流会をやらせていただいています。できれば地元のほかの企業さんとも思っておりまして，決してこの 2 社に固定しているわけではございませんので，機会をねらっております。

大学間の交流としまして，本学は札幌大，小樽商大さんと連携協定を結んでおります。そうした中で医工連携の情報交換会ということで，昨年 4 度ほどシーズ発表，意見交換をしています。共同研究に持っていけるようにスタートをとっております。小樽商大とも意見交換をしながら，小樽商大の先生のシーズを室蘭で，そして逆のバージョンということで，昨年度は今年度に向けての意見交換をやっております。

センターの行事としましては，研究協力会の総会を 7 月に行いました。それから事業推進検討会は 12 月 4 日に開催できました。

飛び地的な話ですが，海外からの訪問ということで，ソウルのインキュベーションセンターという大学関係のインキュベーターを支援している皆さんが，4 月に 22 人いらして意見交換をしました。その際，我々の産学連携を紹介しております。その 3 カ月後に，産学協力団という実務者協議会に 33 名ほど来まして，意見交換会をしております。韓国では産学官に積極的に動き出してきていることが，実感としてわかりました。我々も，産学官の関係で大学をあげて韓国まで行くかというのはできないですけども，韓国は随分熱心だなと思って，我々は受け入れております。非常に熱心なディスカッションで，最初に来た方は 1 時間半か 2 時間ぐらいで終わる予定が，さらに 1 時間ぐらいディスカッションをした経過がありました。

講演会としましては，特にテクノセンターさんと一緒に事業で，大学・企業技術交流会，フロンティア技術検討会を言いますが，寺嶋実郎さんと経産省の前田課長さんに来ていただいて，大々的に大学・企業技術交流会（フロンティア技術検討会；室蘭テクノセンターと共催行事）を開催しております。

地域振興の産学官金連携ということで，埼玉大学の綿貫先生，花巻の佐藤さんに来ていただいて研修会をしました。これは当初の計画ではなくて，皆さんに聞いていただきたいということで入れていただいたプログラムです。

来週から始まります洞爺湖サミットに関連しまして，胆振環境フォーラムを蓬来殿で行いました。170 人ほど集まりまして，日本製鋼所の大西相談役に基調講演をしていただいたあと，環境エネルギーということでパネルディスカッションを行っております。

MOT 技術経営の実践講座として，私，MOT 基礎論をしているので，実際に MOT がどのように産業界で使われているかを，企業にご案内したところ，たくさんの地元の企業が聞きに来て下さいました。4 回

行い喜んでいただきました。第1回目は、本日委員として出席いただいております宮地理事から「商社と技術」というタイトルだったと思いますけれども、ご講演いただいております。ほかにアミノアップの小砂社長さん、光合金の井上さん、日本製鋼所の元副社長だった塚田さんに実践講座を行っていただきました。

CRD セミナーとして、本学の客員教授の先生が中心になり、7回ほど本学で行っております。高度技術研修として、実は一昨年も検討したのですが、人を集めることができなくて断念しましたが、昨年度は大阪、東京、札幌の3会場で高度技術研修で「建設設備の防食技術」ということで研修会を行いました。本学の先生と客員教授の山田先生にお願いして、企画、バックアップをいただきながら行いました。大阪では83人のほぼ定員、東京は曜日が悪かったらしいのですが55人集まりました。札幌では74人ということで、目いっぱい来ていただきました。これは先ほど紹介しましたように、産学連携の講師が腐食を必要としている皆さんに、研修で実務的な内容の部分、実際に起こっている問題を含めて基礎的なお話をいただきました。アンケートをとると好評で、この中から共同研究につながっている例もあります。委員としてここに出ておられます世利先生に3会場で、いろいろご支援いただきました。いろいろな意味でよかったと思っている研修でございました。

教職員の派遣ということで、札幌の大通りに産学官連携が使える仕組みと支援機関の皆さんが集まっているHiNTというオフィスがあります。そこで本学のシーズを紹介させていただいて、企業が必要な部分を紹介するというのを4回おこなっています。産学連携をしております同友会のHoPEでも、本学の先生がシーズを紹介しています。それと青山にオフィスがございまして、そこで接合分科会と本学の先生方のシーズと一緒に紹介しあったということで、本学の客員教授の町田先生の仲介でそういったこともしております。ほかに第3回中小企業産学官連携フォーラムで、ビッグサイトでボルト人形「むろらんボルタ」を朝日先生が紹介しております。

去年は出展が多くて、こんなにたくさん出展しております。わかりづらいですが、黄色で書いているのは道外で行ったものです。京都での産学官連携会議や北洋銀行さん、道銀さんが開催しましたものづくりの展示会がありました。ほかにビジネス EXPO にも出しています。そのほかに昨年度は、埼玉県のスーパーアリーナで「彩りの国、ビジネスアリーナ」にも出展しました。埼玉はものづくりが盛んで関連した4テーマを展示しました。産学官連携のセンターがあり、そこに本学のシーズのパネルを、展示は半年ずつですが展示してもらっています。

新たに北海道新工法・新技術展示商談会というものを、トヨタ自動車のサプライヤーズセンターでありましたけれども、本学からはアルミニウムの腐食防食と薄肉鋳鉄材料の2テーマを出させてもらいました。本当は企業が中心なのですが、本学からも出して欲しいということで出しました。写真は、知事やトヨタの社長さんです。説明している状況です。我々のところにはトヨタさんの要人が来ていただきました。具体的に次の部分の話も来ております。出展は絞り込まなければ我々ももたないと思いつながら、気付くとこんなに展示会に出していました。個々の状況を写真でお示します。

定期的な打ち合わせ会議として、室蘭テクノセンターのコーディネーターと本学のコーディネーターが一緒になって月1回の割合で会議を開催しております。本学と室蘭テクノセンターと交互に新規事業支援、地域産業づくりや地域に残す技術は何かなど、戦略的な打ち合わせも含めております。

産学官連携支援会議は、本日ご出席の小川部長さんのノーステック財団が事務局となっていて、本学を支援していただける機関に、ドーコンさんやノーステック財団さん、銀行、産総研さんや総合支援センターやテクノセンターさん、NEDO さんも入っていただいて、3カ月か2カ月に1回集まり、本学の産学官の連携の支援をいろいろしていただいています。こちらは公式的なものではなく、ノーステック財団の前任者の山中さんが中心になって協力していただいた部分をずっと継続してやらせていただいております。

ほかに五者懇談会があります。五者というのは、信金、胆振支庁、室蘭市テクノセンター、商工会議所、大学が一緒になり、2カ月に1回ぐらい地域支援の情報交換会をしております。

ほかに、地域ものづくり研究会というもので、支援機関の皆さんで産学官金に係わる人たちが、これは北洋銀行さんから共同研究の資金をいただきながら地域ものづくりイノベーション産業研究会をつくり、活動しております。そういった中で支援機関というのは、ものづくりに対してどうあるべきかを勉強している状況でございます。これは産学官連携支援会議の状況、コーディネーター会議の状況です。

昨年度の技術相談件数、これは CRD センターだけが掌握している部分だけですが48件ほど来ていま

す。この中で室蘭地域は 22 件、道内 20 件、道外 4 件です。

プレ共同研究は、研究協力会から寄付金をいただき、プレ共同研究というのを学内で公募します。このときに企業さんと一緒に公募に応じていただけるもので、共同研究にするにはちょっと苦しいという部分を、レベルをあげていただくためにしています。共同研究になる前の予備段階ということです。ヒアリングして、研究をしていただいて、その報告を企業の方と一緒に行っていただく。報告書をつくっていただいて、将来は企業と共同研究をしていくことを前提としております。昨年は 6 件採択されまして、既に共同研究に移行したものや共同研究に向かって準備しているものもございます。

定期刊行物ですが、昨年度のシーズの追加は 19 シーズありました。研究報告、センターニュース、ニュースレター、先ほど地域ものづくり産業のお話しをしましたが、その報告書をださせていただきました。

共同研究、受託研究の推移でございます。皆さんのお手元にある資料が正しいものです。資料の 15 ページでございます。パワーポイントを書きかえるのを失念しておりました。昨年度までの共同研究の件数と金額の推移を示しております。共同研究の件数は、若干上がりぎみです。受託件数は多かったです。トータルの金額は減っています。19 年度の実績ですが、共同研究先の企業として室蘭管内 23、道内地域 29、道外 48 件という推移になってございます。先ほど申し上げましたがアンケート調査をし、顧客満足度を知り、改善を考えてやっております。

アンケート調査については、共同研究を始めたきっかけはどこにありますかという中で、直接教員というのが圧倒的に多いのですが、この中で CRD センター、テクノセンター仲介やインターネット、行政、公設試験というものがあります。アンケートは 108 件に出したのに対し、67 件の回答で、高い回収率だと思います。さらに室蘭テクノセンターとの連携の維持強化と講演会、展示会のイベント事業の強化、インターネットの効果を見きわめたことが必要だろうと考えております。

受託共同研究に対するアンケートの調査ということで、不満なところなどがありましたらということなのですが、ここにあるようなコスト、納期などに改善に効果があったとか、新商品化、新事業化に不満が残るなど、単刀直入な意見も入ってきております。去年 10 月から知財で鈴木先生が赴任されてきておりますけれども、そちらのフォローができず、特許出願、知財関連には十分な達成感が少ないというお話しもいただいております。CRD センターを含め連携の支援のさらなる活動が必要だということが出てきておまして、今後の活動の中に展開したいと考えております。

昨年度もご紹介していると思いますけれども、日経グローバルで本学が、存在感の深まる地方大学ということで、地域貢献度全国 1 位と評価していただいております。我々は 1 位にさせていただいたことを、一つの武器にして、皆さんで共有しながら、うまく使いながら次のステージに向かっていければと活動しております。

19 年度の事業成果をまとめるとこのようになります。全部説明すると時間がなくなりますので、サテライトオフィスの活動と札幌サテライトオフィスの活動でも、室蘭テクノセンターと連携して事業をさせていただいたりしております。今まで説明した分をまとめると、このようになります。以上が 19 年度の活動報告でございます。

○矢島議長

ただいま加賀先生から 19 年度の事業活動についての説明をいただきました。全体をとおしてご意見、ご質問等がございましたらお願いしたいと思います。

○矢崎

15 ページのご説明がありましたが、共同研究の推移を、私先ほど言いましたが 7 年前まで関係して感じていたのは、非常に件数もふえていまして充実しているということで、敬意を表する次第なのですが、その上にあります室蘭管内 23、道内 29、道外 48 とございますね。管内道内を合わせると約 50 強ということになりますね。私の立場から申しますと、質問になりますが、これをどのように評価されているのですか。

○加賀

我々は道内全体をエリアとしてとらえていますけれども、その前はずっと 60%ぐらいで推移していたのです。去年から少しずつ道内の分が減ってきている傾向にあります。一所懸命に地域で活動しているのですけれども、件数としてはそういう傾向が見られます。

○尾谷

全体的にもっと道内を、技術的には多くする方向であるということでしょうか。

○加賀

道内、地域をもっと充実していければと考えております。

ただ道外でも、来るところは拒否するつもりはありませんので、もっとパイが広がればいいと、結果としてそのように考えてございます。

○矢島議長

今のことに関連して、ほかの皆さんからお尋ね、ご意見等ございますか。

○尾谷

今の共同研究、私のところもそうですが、これはずっとあがっていくわけでもなくて、組織が持っている共同研究なら共同研究という事業を推進する中身として、件数的にみますと平成 14 年度ぐらいから共同研究は数値的には変わっていませんね。これは室蘭工大という大学と民間との共同研究機能の全部の先生が毎年やれるわけではなくて、その年、その年の対応ができる量が出ているのかなと思うのです。そのように理解しているか、本当はもう少し高いところにあって、それが今、平成 14 年から 19 年まで、大体上がってきていますので、それは大学として努力した結果のところの数値と見ているのか、いかがですか。

○加賀

上の金額を見ていただきたいのですけれども、件数よりも金額を重視する方向です。文部科学省からもそのように言われているところもあります。企業にとっても金額は伸びています。だからといって少ないところはやらないということではないです。我々、件数的にもう少しできるだろうと思っています。ただ極端に伸びるかというのは、100 件ぐらいが、対応できるところではないかと思っています。

○岸

昨年は運営費、交付金も上がらないですし、研究費もだんだん大変になってきているということで、先生 1 人 1 件。外部資金 1 件、100 万という目標を立てたのですが、なかなか上がりません。ですから 100 件でも、世利先生みたいな人はいっぱいおられます。100 人まではいないのです。そこら辺はまだ頑張るということでもあります。ちょっと意見が違いますが、ですからその意識が、まだ昔の大学のままの状況の先生もいるかなと。要するにお金がないので、研究費は逆に下がっています。いろいろお金はかかっています。外部からお金をとってこないと研究できません。1 人 1 件、100 万とろうと、去年は私が理事になって頑張ったのですけれども、結局、意識はそれほど変わらなかったかなと反省しています。

○尾谷

気になったのは、件数が減って、金額が上がっているというのは、明らかに本州の大手企業が入っているということなのです。道内の企業さんが高額の研究費は出せない。これは実感としてわかりますので、それは明らかに数字的にあらわれる形になります。ここで地域貢献を考えたときに、この辺の未来を大学はどの辺に想定しているのか。

○世利

件数とか金額をふやそうと思うと策はあります。それは単科大学だけでは、申込があったときにできないこともあるので、それはお断りしています。今ふと思ったのは、工業試験場と一緒にやって、室蘭

工業大学単独ではなくて、オール北海道とか、そういうことをできないことではないです。そういう件数を稼ぐ、あるいは金額をふやすという策はあると思うのですが、ある程度単独でやるというのは、ご指摘のように、これぐらいかなという気がするのです。もう一步踏み出そうと思ったら、もう少し知恵を働かせないといけない。仮にネットワークをつくったり、連携したり、そういう団塊の力かなという気がします。

○加賀

すいません、私の答弁が悪かったのですが、確かに本学の教授会でも1人1件出して欲しいという話は、理事からも申し入れられています。できれば先生の意識が変わってくれば1人1件は出せると思います。

今、世利先生からお話しいただきましたように、私は先ほどのシーズの枠を広げていくという点でも、現実に工業試験場さんと一緒に昨年から動いて、広げておりますけれども、一緒になって共同研究、うちで分担できる部分、道工試さんで分担できる部分などで、少しずつですが、世利先生がおっしゃっていた活動を進めているところにあります。現実には函館でも、金額は少ないですが共同研究の展開はしています。地域の部分もなるべく拾っていきたいと考えております。

○宮地

共同研究の地域のパーセントというのが、結果としてこのような数字になってきているということなのではないかという気がするのです。去年、日経グローバルで地域貢献度ナンバー1になったときは、少なくとも道内と管内のパーセントは50数%ぐらいまでいっているのです。そういう意味では地域に対する貢献度というのは、19年度は、これだけの資料をみると落ちていていると思います。これも大学が意図的にやっているわけでもなんでもなく、日ごろの積み重ねが結果としてこのようになっているという点で、尾谷さんからどうなの、道外をふやすのかということに関しては、そうだとも言えないし、こうしたいとも言えないのが実態なのではないかと思っています。

金額的には共同研究、受託研究、文部省の科研費等の外部から研究のお金がありまして、本学の目標としては、大学の予算は年間大体50億円で、そのテンパーセントは外から持ってこようということで、5億をすべての研究費の目標にしております。そういう意味で共同研究、受託研究の金額を見ますと、2億円ぐらいですから、それ以外の科研費等々ありまして、今のところ8%の4億円ぐらいまできているということなので、大学としてはすべての共同研究、受託研究等もっとふやしていただかないと、当初の目的に達しないということなので、決して満足している数字ではないということをご理解いただきたいと思います。

○岸

先生たちもいろいろあるようなので、できれば組織的に連携して、大きいテーマをいただいて、あとはうちのほうで専門の先生にデリバリして共同研究を促進する方法もあるかなと思います。今回、日鋼さんとは4人ほど共同研究できたのです。そういうふうにすると組織的に地域に貢献できるかなという気もしていますが、難しいというところです。

○矢島議長

共同研究の15ページの表をご覧くださいのご意見をいろいろといただいて、大学からもご意見、お考えをいただきましたけれども、ほかにこのことについてご意見等は。

○森本

先ほど加賀先生からお話しがあった中で、僕は室蘭工業大学が地域貢献度1番になったというのは大きなポイントだと思いますし、ある意味露出度が非常に高くなっているということは、大学として19年、あるいはそれ以前の活動も含めて、自負していると思うのです。例えば聞きなれというか、我々の局のほうへ企業から話がある、あるいは技術開発の話があったときに、まずは加賀先生に聞いてみようというので看板になっていただいていますし、そういう意味では外からみえる形をとっていただいて、それがCRDセンターという組織があるということは、我々にとっては力強いと思います。

一方で、こちら側から発信していただく場所として HiNT を使っていただいたり、あるいは他大学との連携を取っていただいているという意味で、言い方は悪いかもしれませんが、先ほど単科大学とおっしゃったのですが、一方で大学がコンパクトにあって、工科系の単科大学だということを強みに出して、外に出しているのは高く評価できると思いますし、地域との関係も強いのではないかと思います。

先ほどのグラフに戻るつもりはないのですが、数字がどうこうというのは別としても、道内だけに限らず、ほかの大学もそうなのですけれども、皆さんブロックで一番大きい大学は、基本的に地域の貢献というのを旗に出しながら、全然意識が、実質的にないのです。室蘭工業大学は、そういう意味では、それを出しておられるというところが学内の、トップマネジメントから各先生に至るまで、旗が立っていて僕はいいと思います。もう少し大学だけではなくて、先ほど JSW さんとの共同研究もありましたけれども、室蘭の町とくっつけるならば、金属材料、あるいは環境とかいろいろな話が出ていますので、産業も含めたところで外から見える看板としてつなげてしまえば、正直言うと道外の知る人ぞ知るではあるかもしれませんが、学生も含めて、室蘭がどこにあるとか、こういう特徴があるというのは、それほど知名度が高いとは思えないです。それを強く出していくには、大学だけではなくて地域の産業とも連携しながら、外から見える形にしていくというのが一つのやり方だと思います。

別の視点ですけれども、我々は今、産業クラスターをしています。IT とバイオを札幌でしているのですけれども、別に札幌だけじゃなくてほかの地域もあるとか、あるいはほかの地域ではもう少しばらけていると、バランス取るとかやりにくいのですけれども、ここは大胆に IT とバイオを外から見えるようにするというのが、我々の戦略でやっていますけれども、そうするとほかの地域から、ちょっと話をしてみようかというきっかけにはなります。ネットワークとしては地域でもっと重層的な幅の広いものでいいのですが、外から見えるときはわかりやすいものが 1 本か 2 本の柱が立っているのが、先ほどの発信力というところでも強みになります。おそらくこれは学内の学生さんにとっても、大学の活動が外へ広がっているというゲートウェイであるという意識を強める意味でも、非常に役に立つのではないかと思います。

○矢島議長

森本部長から、国の政策を進めておられる立場から、戦略的に情報発信というところでの貴重なご意見をいただきました。ほかにございませんでしょうか。

小川

ノーステック財団です。昨年、室工大さんと連携させていただいたのですけれども、やはりどちらかというと地元のものについては室蘭テクノセンターがおられますので、地元でやっていただく。ただ地域間交流を重点にという考えを持っておりまして、そういう意味ではこれからやっていかなければならない。今お話しがでたとおりだと思います。その中で、例えば函館地域と交流をやっておられますし、札医大とは医工、医学工学部連携をとっております。具体的に共同研究に結びついたものはあるのでしょうか。その辺の状況を聞けたらお願いします。

○加賀

函館は、道工試と連携しながら、函館の中で共同研究を展開中です。札医大は、共同研究に向けて一部準備中でございます。

○小川

シーズ段階ということですか。

○加賀

はい。できれば札医大との将来を見越して、地域の産業にも落とし込めるようなものをつくれればと、長い目でみております。まだそこには至っておりません。ただ医学部と工学部というのは、言語が違っているのでその辺の帳尻を合わせながらやっていくことをしっかりやらないと、どこかでばらけちゃいますので、助走段階をしっかりやらせていただいています。今年から共同研究がスタートできると思います。

○小川

私どもも連携させていただいているので、そういう面からのプッシュは大切だなと感じております。

○矢島議長

まだご意見がおありかと思いますが、時間の関係もございますので、先に 20 年度の CRD センター事業について加賀先生からご説明いただいた上で、改めて全体のご意見等をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

○加賀

ディスカッションをする時間がないと申しわけないので、手短にお伝えします。

20 年度の CRD センターの事業計画を提案させていただきます。資料に書いてございますので、あとで戻っていただければということで省略させていただきます。1～10 にあることを重点的にやっていこうと考えております。

20 年度の CRD センターの重点活動としまして、地域企業のニーズの把握。広報活動の充実、共同研究プロジェクトの発掘、顧客企業、研究協力会、受託共同研究を受けている企業のサービスの充実、拠点形成プロジェクトへのチャレンジをしたいと考えております。地域共同研究開発センターのスタッフは、昨年まではこういったスタッフでしたが、先ほど紹介していただきましたように、関川特認准教授と伊庭野専任コーディネーター、さらに大学から我々の足でありますウィッシュを入れていただいたことで、かなり小回りがきく動きができるのではないかと考えております。

センター内の事業でございますけれども、研究協力会の役員会は 6 月 18 日に終わっております。本日、事業推進検討会。講演会、研修会でございますけれども、大学・企業の技術交流会を 11 月に 200 人ぐらい集めて、室蘭テクノセンターとものづくり推進会議と共催ということで動いております。教員の研究シーズの紹介を本学の共同利用施設を使って、行おうと思っております。ほかに高度技術研修を東京と函館で行うことを考えております。

MOT の技術経営実践講座として、既に準備しておりますけれども、8、15、22 日に資料に載せている方々にやっていただきます。CRD セミナーとして、本学の客員教授によるセミナーを企画しております。いろいろな方が見えています。出展は、既に 2 展ほど終わっておりますけれども、同友会さんが西胆振の企業力ということで洞爺湖サミットに関連したことを伊達で行い、本学のシーズも出させていただきます。産学官連携推進委員会も京都で終わっております。イノベーション・ジャパン、ビジネス EXPO、ほかには先ほどの埼玉のビジネスアリーナを予定してございます。多分、このほかに頼まれてふえるものが出てくると思うのですけれども、我々も選択と集中でやっていきたいと思っております。

企業との技術交流会ということで、既に日本製鋼所とは 6 月 4 日に終わっておりまして、今年からは小さく具体的なテーマでやっていこうということになっておりまして、共同研究につながるような仕掛けをつくっております。総研さんとも、またやらせていただければと思っております。大学間の地域間交流ということで、札幌大さんとの医工連携で、できればフォーラムぐらいをと考えてございます。目標としては共同研究への発展と新規産業への展開ということで、こちらは時間がかかりますけれども、やっていこうと思っております。小樽商大とも商工連携をしていきたい。函館高専との連携で、研究シーズを地域に紹介しながら本学のことも知っていただき、場合によっては本学と函館高専とも連携ができる。同じことが苫小牧高専さんともできればと思っております。今、苫小牧で 10 機関で連携もしていますので、有機的な連携強化で地域に貢献したいと考えてございます。多分、高専さんにしても、我々にしても先生方がたくさんいるわけではないので、シーズの間口を広げて連携していろいろなことをやるのが、地域のサービスとしてはいいのだろうと考えてございます。

異業種交流グループの支援としまして、室蘭には「創造」というものづくり系のグループと環境推進コアというのがあります。それぞれ 6 回の例会と 8 回の例会ということでテクノセンターさんと一緒に支援していくことを考えております。

定期的な打ち合わせ会議として、テクノセンターとの会議、連携推進会議、五者懇談会、HiNT の連絡会など打ち合わせに参加して、本学のシーズ、産学官連携につながることをやっていきたいと考えております。

研究シーズ集刊行物の発行他でございますけれども、研究シーズ集のシーズの追加ですが、今年度は15件を目標にしております。赤いシーズ集をご覧いただいていると思いますけれども、前年度19件、その前は49件、今68件のエントリーがありますけれども、15件を目標に学内で募集しましたところ、予算オーバーしましたけれども、22件ほどエントリーしていただけることになっておりますので、シーズ集が充実できると考えております。CRD センターニュースとニュースレター、ホームページを改正して、タイムリーにいろいろな情報を発信していきます。それから CRD センターのパンフレットも今年度新たにしていきたいと考えています。

最後に、センター直接というより本学の幸野先生と経産局さんの事業で、先ほど森本部長さんからもご紹介ありましたけれども、原子力人材育成プログラム事業を採択いただきまして、本学の座学でエネルギー材料、原子力材料の部分とエネルギー材料の実験実習ということで、実際に理論と現場での共同実験やプロセス接合実験、イオン照射実験等を通じて、原子力教育支援プログラムをつくって人材育成を計画しております。これには日本製鋼所さん、東北大学、発電設備技術検査協会等、武蔵工業大学などいろいろなところのご協力をいただきながら、実際に原子炉の10分の1の縮尺モデルを日本製鋼所さんをお願いしてつくっていただきながら、最後の熱処理や溶接、検査まで実際の実験を通じて勉強していただくことになります。これは学生さんと、産業人の方、両方に入っていただくことになります。これは石坂コーディネーターと一緒に幸野先生のコンテンツ作りに手伝いをさせていただいたということで、CRD センターの事業というよりはトピックスです。産業人材を集めるのは CRD センターとして役割を担わなければならないと思っております。今年度からスタートします。8月末からスタートできるような話も聞いておりますけれども、ご紹介させていただきました。以上で計画の説明を終わらせていただきます。

○矢島議長

20年度の事業ですが、終わったものもございますが、これから進められるところについて加賀先生からご説明いただいたところでございます。先ほどご説明いただいた19年度の事業報告もあわせて、どのようなことでも結構でございます。ご意見交換等を進めてまいりたいと思います。できればまだご発言いただいていない方を中心に。

○下地

先ほどのお話をうかがっていて、多少気にしていたのが CRD センターの活動に対して、本学の学生が主体的にどういう切り口で、どういう係わり方をしているのかなというのが、わからなかったのですが、今ちょうど原子力の話が出てきて、取り組みをしているというのはわかったのですが、現実にはいろいろな講演会の形式というか、あるいは MOT の実践講座だとか、学生さんはどういう参加のされ方をしているのですか。

○加賀

大学の機能として教育と研究と社会貢献というのがあります。CRD センター自身の役割としては、学生さんへの係わりというよりも、むしろ社会貢献、産業に対する係わりがメインになってございます。それで MOT は、私がたまたま授業を担当して、学生さんとかかわっていますけれども、実際には学生に係わるのは教育の部分ですので、先ほどちょっとご紹介したのは産業人材の育成という点、MOT の部分でご紹介させていただきました。CRD センターとしては、企業さんを中心にした係わりがメインでございます。

○岸

共同研究などは結ぶものですね。そうしますと私たちも何かしなければなりません。その時に教えていることの応用問題みたいな感じで学生と一緒にやって成果を出すということでは、一緒にやっているということで学生も認識しているはずですよ。

○下地

どうして質問したかと言いますと、採用する企業側としては、このごろ目立つのですけれども、学部

卒とマスターを出てきているものとでは、物すごい差があるのです。何かなという、外に対して先生と一緒に知見を広めていくというか、圧倒的に経験の差があるのです。入ってきたらすぐ院卒だと使えます。そんな時代になっているので、大学にいる間に、先ほどシーズ、シーズとありましたけれども、学生にシーズを植え付けといて社会に出せば、それも一つの成果なのです。そういう視点がもっているのではないかなと。ちょっと気になったのです。

○岸

今、景気がいいものですから4年生をどんどん取っていくのです。大学院に行けというのですが、例えば80%とか、せいぜい60%が上がればいいのですけれども、それは私たちも願っているところなのです。でも共同研究などをしますと、大学院主体でも一緒にやりますので、私も少しやりますので、全然違います。

○加賀

今のお話は非常に重要な意味を持っております。うちは工学部で、先生方、マスターの学生が共同研究をやる、やらない先生も含めて持っているとしたときに、産業サイドから見たときに、こういう教育をして欲しいということの、もう一つの提言なのです。そういう意味からすると、先生方には、なるべく企業との共同研究も大学の方針で1人1件やってほしいということをお願いしていますが、共同研究という数字以外に、そうすることによって学生教育につながるからそうして欲しいというのは、一つの切り口かもしれないと思いながらお話をうかがいました。

○矢島議長

今、学生さんの教育に触れるような貴重なご意見だったと思います。ほかにご意見等ございませんでしょうか。どうぞ。

○秋山

20年度のセンターの重点活動の報告の中に、顧客企業へのサービスの充実があるのですが、4番目です。その中に研究協力会へのサービスの充実が重点項目にあげられていますけれども、研究協力会というのはCRDセンター、あるいは室工大さんの研究活動に対する後援、支援組織だと理解してよろしいでしょうか。

そうすると協力会のメンバーの方というのは、資金を一応、会費というのでしょうか、そういうものを提供しているということですか。会費をいただいている企業へのサービスを充実させるという。金額にもよると思うのですが、企業さんの立場からすれば地元にいるのだから、それなりのものを出しておけばいいだろうという程度で協力会の中に入っている方もいないわけではないと思うのです。そう考えると、もう少し大学としていっぱい資金を出していただいて、それに見合ったサービスをするという考え方もあると思うのですが、これは今までどういうサービスをしていて、20年度からはどういうふうに充実させていくかが、これだと見えない。

○加賀

我々もどういうサービスをしたら喜んでいただけるかというのは、実はずっと探っております。資料の53ページ目をご覧ください。53ページ目から研究協力会の企業の加入、協賛の一覧が書いてございます。私も着任して3年目なのですが、センターができたときから、ずっと協力会へ入っている方へはサービスを考えていなかったのです。我々に今何ができるかという、1年目の時はせめて名前だけを入れさせていただきました。名前だけでも全国にPRできるし、営業項目も入れてやらせていただきましたが、これではだめで、私は研究協力会に入っているということで、いろいろな情報は出しておりますけれども、本当にどうしてもらうのが一番いいのかということを、ここに一口に顧客企業へのサービスと書いていますけれども、どういうサービスがいいのか、特に研究協力会に関しましては、前回の研究協力会の総会の時に話題になりました。少し足しげく通い、御用聞きをして、本当のものを引き出したほうがいいですよと会長から言われております。

それから一口5万円が入っていただいております。その資金を集めて、我々はプレ共同研究という形

で学内に展開したり、CRD センターの産学連携に使わせていただいております。我々としてはCRD センターのファンクラブだと思っているので、ファンを大事にしないとだめだろうということで、あえて研究協力会を顧客としてとらえてサービスをしたい。本当はこういうサービスを言いたいのですが、どういサービスがいいのかを含めて、多分多種多様だと思います。そういった中できちんとお客さんが喜ぶというか、顧客が満足するようなサービスを見つけていきたいと考えてございます。

○秋山

苫小牧高専にもこのような組織はあるのですけれども、やはり室工大さんを参考にさせていただいて、サービスはしていかなければならないのかなと思っていますのでよろしくお願いいたします。たくさんお金をもらえば、それなりの責任を持つてしなければならないという、相手も期待すると思うのです。会費を上げるということではないです。

○加賀

ただ私は、例えば5万円でも10万円でもお客さんからもらったら、それに見合うか、見合わないかは別として、たくさんサービスしていただければ5万では申しわけないから、もっと上げるということになるかもしれません。研究協力会に入っているという部分で何らかをお返しするという気持ちで動かなければいけないと思っているものですから、ご意見いただければと思いました。

○世利

サービスの話ですが、こういう観点からサービスできるかもというお話があります。私ども、講習会や研修会で大学に来てくださいというのが通常の発想なのですけれども、こういうところではだめだろうというので、自己紹介のときに言いましたように、出島のように、要するに自分たちから行かなければだめだろうと考えています。私の腐食防食の関係で言うと、道内のトラブルが起こったところに行き、いろいろ講習会をしました。全国を回っているのですけれども、その時に話をいろいろするのですが、相談事とか、シーズがあるのです。こういうことをやっている方はいませんかとか、そういう話があるのです。私の講習会の事ではなくて、建設や土木、電気とか、そういうシーズがあって、それをどなたかできないか。オール北海道で回すというのはそれなのですけれども、中立機関として営業とは言いませんけれども、お話しがあつたときに、ご寄進をいただいている企業を紹介する。具体的に言いますと、苫小牧に会社がありますけれども、そこでこういうこと、目ききできる会社はいないとか、金型ができる会社はいないとか、そういう情報があるのですが、今のところ我々あちこち情報を得ていますが、生かしきっていないので、加賀センター長と一緒にいき、そういうことを生かして、企業を紹介する。けちなこと言わずに、お金出したところが第一優先なのですが、そういうサービスもしたほうが、本学としてのプレゼン性があるのではないかと考えています。

○矢島議長

先ほど来から、加賀先生からお話しがございましたけれども、我々も大学と一緒にになって企業さんに出かけます。例えば適当かどうか、現場主義といいますか、トヨタさんの生産方式でいうと現地現物という言葉になるのかもしれませんが、現場感覚というのは大事だなと思っています。研究協力会の企業さんに、私どもも一緒にになってお手伝いできればと思っています。

○宮本

地元の企業の立場ですが、CRD センターさんとは直接ではありませんが、私ども電気事業の関係につきましては、最近、いわゆる大学の電気離れと言いますか、電気工学科というものがなくなっている大学がふえているという実態がございます。私ども、大学さんと一緒に共同研究もさせていただいているのですが、どうも大学さんが、今学生に人気がある、あるいは企業が伸びている分野の研究に目が向きすぎてしまっていて、私どもと一緒にやっただく先生方が少なくなっているのが心配事でございます。そんなこともございまして電気事業の関係の会社が集まり、何とか産学連携の強化のために何かできないかということで、今年度から取り組みを始めてございます。

一つは研究マップをつくって、どういうニーズがあるのかを整理してみたいということで、大学の先

生方にもご協力をいただいて、どんな研究ニーズがございますかというお話と、それに私どもからこんなこともやってもらいたいというお話を、かなり前広に、必ずしも電気工学ばかりではなく、環境や IT 関係なども広く含めて研究マップをつくって、その中で取り組んでいただけるものがないでしょうかと、逆に企業側から働きかけてみたいと考えてございます。

室工さんとも意見交換会を去年もしていただきましたし、今年もしていただこうと思っておりますが、どうしても点と点と言いますか、そういう形でやっていると、なかなかうまく折り合わない。ではまたテーマを変えて、先生も変えてやってみましょうかということだと、非常に時間がかかってしまうので、室工さんばかりではないのですが、少し広げた形で整理をするのも必要かなと。今年は御用聞きということで、各企業さんに回られるというお話もございますが、できれば少し整理をしていただいて、研究マップのような形で広げていただければ、いろいろなところで大学のシーズとニーズがマッチする部分が出てくるという気がします。日鋼さんや私どもは、毎年、このような形でやらせていただいているので、接点がでてくるかもしれませんが、ほかの地元の企業さんは、会社も特殊、大学の先生方もそれぞれのテーマをお持ちだということで、折り合わないところがあるのではないかと思いますので、少し広げて整理していただいて、その中で、企業にもおもしろいテーマだねとか、あるいは先生方でも、今すぐは取り組めないけれども、将来取り組めるテーマかなということで、将来につながる話がでてくれればいいと思った次第です。参考までに。

○加賀

先ほど電気関係を含めて話し合いとか接点を求めるお話をおっしゃっていましたが、我々 CRD センターとして、一緒に北電さんとやられているときも CRD センターが入っているのは、そのテーマだけではなくて、何かありましたらというワンストップ的なところで、一回受けましょうという意味でございまして、もし今おっしゃった電気関係の部分で広いニーズを持っておられて、こういった部門をやっていただきたいというお話がありましたら、逆に我々、道工試も含めていろいろなところでお話をいただく機会をつくっていただきながら、その中で振り分けられる仕掛けをお願いしたいなと思います。多分、苫小牧高専さんにもそういった分野の先生、我々も少ないですけども、どこかでひっかかる先生がいるかもしれませんので、受け取る側も広げさせていただいて、話し合いの機会をセットしていただければと思います。逆に中継する人間が集まって、振り分けるほうが直接先生が行くより、意外とうまくいくかもしれませんのでご検討いただければと思います。

○宮本

今、全国で、高専さんを含め電気系の先生方のお話を聞かせていただいています。それを元にマップをつくり、それを先生方にフィードバックする形で、さらに輪を広げていこうと取り組みを始めたばかりです。

○加賀

本学でも少しでもかかわれるところがありましたら、ぶら下がっていきたいと思いますので是非。

○宮本

何人かの先生方には既にご提案をいただいております。

○矢島議長

今のようなお話しで、少し交通整理をしながら、話し合いいただく場面が大事になってくると思います。ほかにご意見等ございませんでしょうか。

○伊藤

やはりいろいろシーズを PR していただいているということですし、私どもは紹介していただいているのでわかるのですが、何も知らないところだと展示会で見たり、新聞で見たりということになると思うのです。そういった意味で共同研究の件数は多いのですが、加賀さんのお話しでは技術相談の件数がわかっているだけというお話しでしたが、もっと技術相談の件数が多くてもいいのかなと思うので

すが。

○加賀

多分、学内の先生が直接行っているのです。我々、先生が直接しているものまではキャッチできない状況で、件数は何倍かになっているはずなのです。世利先生あたりでも年間 10 件や 15 件は個人的に受けているはずです。そうするとかなりあるのですが、いちいち我々に戻してほしいというのは、学内の仕組み上できないので、今、CRD センターに来たものだけでご紹介させていただくことになります。

○伊藤

先ほどの研究協力会のお話がありましたけれども、その会員の技術相談はいくらでもしていいとか、特典はあるのですか。

○加賀

日鋼さんも研究協力会に入ってもらっていますけれども、何回でも問題はないです。ただ研究協力会でなければできないスペシャルサービスは何かを含めて検討しているということです。協力会でなくても、幾らでも対応します。我々ができない部分は、意識的に道工試さんに振らせていただいたり、いろいろなことをやらせてもらっています。少しでも引っかけられるように我々も仕掛けをつくろうとしています。

○岸

基本的には、一応みなし公務員ですので、来るものは拒まず、去る者は追わずで、来るものは何でもやらないといけないということで、わからないことがあればどんどん大学に来て欲しいというのがあります。

○尾谷

多分すごい数の技術相談を先生方で受けておられると思うのです。やはりいろいろなところに顔出しをするのも重要なことで、数字に書いてしまうと年間 40 何件で、それしかないのとか勘違いされることもあります。だとすれば、道内の先生方の数、室工大のイントラのネットワーク上に、例えばそういう項目が来たら先生が、ありましたというようなことを提供するようなシステムで、それが計測されていって、年間何百件ありましたということができれば、それを数値化するほうが有効なのかもしれないですね。

○岸

基本的には日常茶飯事ですよね。

○矢島議長

カウントするのはなかなか難しいと思いますね。

○加賀

去年は、8 件が CRD センター経由でした。逆に 8 件から見るともっとふえているという見方で表現したかったのです。ただ大学全体としては、そんな数ではないというのは事実です。

○世利

僕も CRD センター経由でやっているのは理由があります。企業と 1 対 1 ですと、理不尽なことを言われるのです。そうすると、サービス精神でもっとと言われると断りにくいのです。中に、そういう機関があると、密約とかはできないので、公明正大でいけますので、そういった観点からなのです。けれども、僕は中で見聞きする限りでは、こんな数ではないです。

○岸

一度、共同研究とかしますよね。何か関係を持ちますと、来やすいですね。それがずっと続いていきます。ふえればふえるほど、ふえてきますよね。

○矢島議長

我々も、各先生方とご相談やご指導等をいただくのにお伺いするのですが、その件数はカウントしておりますけれども、少なくともそれだけで三桁にはなっていますので、一つの案件で何回もお伺いするものもありますから、多分、とてもこんな数字ではないと思います。

○森本

今、産学連携の話が出ていた関連でお伺いしたいのですが、大学には知財本部がありますね。知財本部もある意味では企業との共同研究なりで出た成果を扱う形ですけれども、CRD センターとの関係というのは、どういうふうなのですか。

○加賀

知財本部の鈴木先生もお見えになっていますけれども、隣どうしで、1週間に1回ずつ、岸理事が両方とも担当なさっていますので、いろいろな問題はお互いのコミュニケーションの中で必要な部分をやりとりできる。場合によっては一緒に、企業と対峙しながらやっていきます。

○森本

連絡は密なのはわかるのですが、ファンクションとして、簡単に言うとCRD センターは企業との窓口になりますと。そこで出てきた成果の管理、あるいは特許の申請の実務に関しては知財本部がやりますということですか。

○加賀

そうです。

○森本

わかりました。

○岸

これからCRD センターと知財本部をいかに有機的にやっていくかを検討中ですので、もう少し時間をいただきたいと思います。

○森本

知財本部が知財有機的な機能でもいいのですが、他大学のこともいろいろ調べましたが、産学連携組織と知財管理部、本部が同じ問題意識でいくところとはうまくいっている気がするのです。つまり大学の財産だからといって、それで金を取らなければいけないという独法化したときの、最初の意識でいくところはトラブっているところが多くて、いかにうまく流すか、その上での事務処理はちゃんと引き受けるということとはうまくいっているような気がするのです。先ほどからの、今回の運営方針も基本的に産学連携のほうにいく。例えば先生方のところへ個別相談にきたときにCRD センターを通していないというお話しがありましたが、知財本部とすると、管理したいという観点ではなくても、個別相談に来たときには窓口を通しておくというのも一つのやり方で、ただその時のベクトルが、おれたちのものだから、むやみやたらに出すなということになった瞬間にうまくいなくなり、同じ方向に向いたときは物すごくうまくいっているのです。そこも多少連携があって、すぐそばに人がいて、同じ方向に向いているという、単科大学の良さを強みにされるのはいいと思います。

○矢島議長

今の森本部長さんのお話に、鈴木先生、何かございますか。

○鈴木

特別ございませんけれども、おっしゃるとおりでございます。私ども部屋も隣同士ですし、日常的に会話は可能です。共同研究から出されたものについてはそういう流れになりますし、また単独に生まれた知財に関して言いますと、どこまで知財本部が関知すべきか。どの段階で CRD センターにお任せすべきか、その判断は難しいことがありますけれども、その辺もうまくやっていこうと。おっしゃるとおりお金をちょうだいするというのではなくて、大学の知的財産を世の中にうまく使っていただくという立場に立っていれば何の問題も起こらないです。

○矢島議長

予定の時間に近づいてまいりましたけれども、建設業協会の中田さん何かございませんか。

○中田

特にないのですけれども、この会の会員だという責任を感じていまして、おとしからシーズ集を使って、業界の会員に、放っておくと目にしないだろうということで、なるべく業界として情報提供して、もし何かあったら CRD センターを活用したほうがいいですよと投げかけているのです。まだ共同研究とかは見つかっていないようですけれども、一部はかなり前から風力発電の関係でやっている方もいらっしゃいます。そういうものを参考にして使ってくださいということは、PR しています。ただニーズとシーズがマッチしないようで、そこら辺の、今まで大学は敷居が高くてそういう事ができなかったこともあるのでしょうかけれども、CRD センターにもなかなかで、どうしたら情報が取れるのかという、そこら辺の段階なのです。できるだけ敷居を低くするようなご協力を協会としてやっているということです。

○矢島議長

加賀先生、今のお話しで、センターとしての対応というか、もしお願いできるとすれば協会の会員さんが集まっておられるようなところに我々も一緒に行かせていただくような形でお伺いするということはいかがですか。

○加賀

同じようなことを考えておりました。私も CRD センターの PR のパワーポイントを持って行って、こんなことができます。こんなことをした例がありますということを PR させていただきたいなと思っております。

実は昨年、同友会さんには、そういうことで PR させていただきましたので、室蘭支部も同じような形で、機会があったら言っていただければ、宣伝させてください。PR の場、即売の場がないと、我々もうまくできませんので、是非よろしくお願いしたいと思います。

○中田

建設業協会だけだと企業数は 40 社ぐらいなのものですから、商工会議所の建設業部会とか、建設業プラス専門業者の方も入っているので、その方たちに声をかけて、去年はやっていないはずですが、おとしはこちらに見学に来て、きっかけづくりを始めています。

○加賀

人数が少なくても結構でございますから、何回でも構いません。一度にたくさん集めるとコミュニケーションが取りづらくなりますので、意識なさないで、20 社でも 10 社でも結構ですからよろしくお願いできればと思います。

○中田

その程度はさせていただいています。

○矢崎

同じ事が機械工業会でも。残念ながら、私の指導不足というか努力不足もあります。CRD センターさ

んの PR もまだまだできていないですけども、先ほどの 37 社のうち 14 社が CRD センターの協会の会員なのですけども、比較的少ないですが技術的にも、何かできることがあるのではないかと考えております。

○加賀

是非、皆さんの集まりと今の工業界の皆さんのところの企業を回れるように、今年はマンパワーも補強されていますし、足もできましたので積極的に回りたいと思います。あと皆さんがお集まりの機会がありましたら、行って PR もさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いしたいと思います。

○矢島議長

予定の時刻近づいてまいりました。

本日、委員の皆様方それぞれの立場で、大変貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。一応、本日の予定の討論テーマにつきましては以上をもちまして終了させていただきたいと思います。ただせっかくの機会でございますので、そのほかに CRD センターさんに関すること、あるいは産学連携に関すること、どんなことでも結構ですから、何かご発言されたいというのがございましたらお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

○世利

今の協会さんや工業界とか、とにかく困ったことがあったらとおっしゃったのですけれども、何でもいいますから加賀先生の CRD センターに困ったことがあれば、疑問なことを言っていただくと、加賀先生、本学の中のどういう環境の先生だと掌握されていますので、担当の先生に振って、その先生がすべてのことはカバーできませんので、その先生が、また違うネットワークを持っていらっしゃるので、自分のところでできないことは振って、何とかお役に立つようなこと、サービスはさせていただくというのを、加賀先生ともお話ししています。本学だけで処理できないところは、道工試さんとか、相談はいろいろあると思うのですが、とりあえずこちらに振っていただくと、何とかしますよというのを加賀先生と話しています。すべてのことはできませんから、オール北海道、オールジャパンで、自分のところの研究仲間とか、知り合いのところにこういう相談事があると、この分野はだれが一番よく知っているのかというものは大体わかります。とりあえず振っていただくと、ゼロよりは何かの情報が得られると思います。

僕の分野ですと、こういうタイプで腐食して、原因がわからず困っている。これに関してはどうしたらいいかとかでしたら、僕らの担当でしたら何とかやりますけれども、違う分野の事だったら、学会や研究仲間振れます。すると日本の中でだれがどういうことをやっているのか大体わかりますので、そういうアドバイスはできると思います。

○矢島議長

具体の案件等については、ご遠慮なく申し出をいただきたいと思います。ほかに何かございますでしょうか。

ございませんようでしたら、予定の時間でもございますので、本日の検討会はこれにて終了させていただきます。

なお本日の議事録のまとめにつきましては、こちらにご一任を願いたいと思います。

○司会

検討会の閉会にあたりまして、担当の岸理事より挨拶がございます。

○岸理事

本日は、何かとお忙しい中を平成 20 年度室蘭工業大学 CRD センターの事業推進検討会にご出席いただきましてありがとうございます。

2 時間という短い時間で、議論は 1 時間ぐらいということでしたが、委員の方々から貴重なご意見、ご助言をいただきました。特に経産省の森本部長からは、地域産業と絡めて、大学が外から見えるよう

にとか、ドーコンの下地さんからは学生もシーズを持っているということで、勝手に解釈しているのですが、もっと大学院をふやした方がいいよというご提案、北電の宮本所長さんからは研究マップをつくり、ニーズとシーズのマッチングをするべきだと、日本製鋼所の伊藤所長さんからは、技術相談の件でもう少し他に開かれた大学になるべきだと思うのですが、と貴重なご意見をいただきました。これらはすぐさま CRD センターの活動や運営計画、あるいは大学運営に反映させていきたいと思っています。

国立大学も少子化等で、大学も多いという雰囲気でありまして、志願者倍率を確保することとか、教育はもちろんなのですが、何よりも地域の中の拠点として、地域に支援されませんと将来はなくなるという厳しい状況にありますので、地域の活性化に貢献できて、地域になくてはならない大学、あるいは愛される大学になるように、我々教職員一同、あるいは学生も入れまして、全学をあげて対応していきたいと考えております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

私、特に気になっていますのは、室蘭と苫小牧地域、苫小牧地域はトヨタとかいろいろ来ていますので、そこら辺の活性化のために、工大と苫小牧高専が一致協力して、活性化に協力していきたいと思っていますので、今後ともご指導お願いします。簡単ですが閉会の挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。